

第6回  
だいい かい

日本語の教え方  
に ほんご おし かた

伊呂波  
いろは

教材開発  
きょうざい かい ぱつ

日本語国際センター専任講師 柴原智代・島田徳子  
にほんごこくさい せんにんこうし しばはらともよ しまだのりこ

海外で活躍している日本語教師のみなさんから、よく「日本語教授法を知りたい」「すぐに使える授業活動を提供してもらいたい」という要望をいただきます。

「日本語の教え方 イロハ」のコーナーでは、日本語国際センターの専任講師が、日本語の教え方を学んだことのない方に、「コースデザイン」や「読解」「会話」「聴解」「評価」などの基本的な教授理論、教授知識をわかりやすく解説します。既に日本語を教えている方も日本語教授法に関する基礎固め、知識の再点検にお役立てください。

1. はじめに

皆さんの中には、「自分たちのコースにあった教材を作りたい」と考えている人がいると思います。今回は、海外のある国にある「さくら日本語学校のコースのための教材を作る」という事例にもとづいて、教材作成の方法を紹介します。

2. いきなり作る。そして…



ある日、さくら日本語学校の校長先生は、教務主任のラン先生に次のように言いました。「中級コースの学習者は、『コースを終了したのに会話ができない』『行ったことがない東京の話ばかりで教材がおもしろくない』と言って、日本で市販されている教科書をやめて、中級

コースの自作教材を作ってみたらどうですか。まず、教材の企画書を作成し、提出してください。」

翌日、ラン先生は、同僚のチュン、トウイ、福山先生に次のように言いました。「…のように、校長先生から教材作成の提案がありました。私は来週までに第1課『自己紹介』を作りますから、皆さんもそれぞれ1課ずつ試しに作ってください。」

1週間後：

ラン「皆さんできましたか。」

福山「計画もなくいきなり作るなんて無理ですよ。」

チュン「まず、今使用している教材の問題点が何か、明確にしないとそれを補う教材にはなりませんよね。」

トウイ「自己紹介や電話の会話以外に、アイデアが浮かびません…。」

…とても気まずい雰囲気で会議が終わりました。

3. 「評価(See)－計画(Plan)－実施(Do)－評価(See)」のサイクルで作る

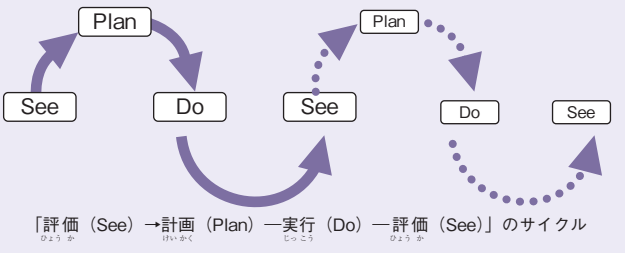
ラン先生は、日本語国際センターのさくら先生に相談しました。さくら先生は、『教授法教材シリーズ14巻：教材開発』という本を送ってくれました。この『教材開発』という本を読んで、みんなで教材作成の手順を確認しました。

<教材作成の手順を確認する> (『教材開発』1-2)

教材を使う対象となるコースの現状分析をしないまますぐに、書き始めたり【「See (評価) → Plan (計画)」がない】、作成したあと内容の見直しや改訂を行わないまま作りっぱなしにしたり【「Do (実行) → See (評価)」

がない】する方法ではいい教材にはなりません。

まず、教材を使う対象となるコースの現状分析を  
ていねいに行う、つまり、現状の「See (評価)」から  
教材作成を始めましょう。そして、現状の「See (評価)」  
結果をふまえ、教材作成の「Plan (計画)」を立てます。  
この「Plan (計画)」の段階で、教材のねらいを明確に  
し、教材の設計図とも言えるシラバスと課の構成を作り、  
教材の一部分(プロトタイプ)を試作して、計画として  
妥当かどうかチェックし、その結果に基づいて計画の見直し  
を行います。「Plan (計画)」の段階に、小さな「Plan-  
Do-See」のサイクルが組み込まれることになります。



**1 教材のねらいを5つのステップで考える**  
『教材開発』2-1)

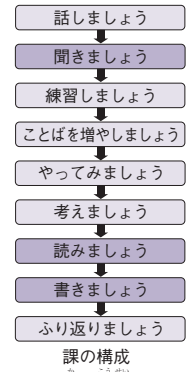
まず、ランさんたちは、次のような手順で教材の  
ねらい(教材で目指すこと)を考えました。

- ① さくら日本語学校のコースの現状の課題をまとめ、  
問題が何か把握する。今使用している教材を分析し、  
問題点を明確にする。
- ② コースの課題を解決するために、教材作成がいいか、  
ほかの方法がいいかを検討する。
- ③ 現状の課題のうち教材作成で解決できる部分は何か、  
明確にする。
- ④ 教材作成で解決したい課題に、教材で実現したいこと、  
実行可能性を考慮して、教材のねらいを検討する。
- ⑤ 教材のねらいを決めて、それを表す教材名(仮)を  
考える。

ランさんたちは、主な対象者を日本研究者にしほって、  
この国の日本研究者と日本人の研究者が日本語で話し、  
関係作りができるような教材を作ることにしました。  
教材名は、『日本語で研究者と話そう(仮)』にしました。

**2 教材のシラバスと課の構成を作成する**  
『教材開発』2-2)

次に、ランさんたちは、研究者に必要な日本語能力を明確  
にするために、資料を探したり、日本研究者にアンケート  
やインタビューをしたり、教授法を勉強したりしました。  
そして、「日本研究者が、日本語で話をして関係作りが  
できる」ために必要なことは何かを検討しました。その  
中から、学習目標を決め、教材全体の設計図である「教材  
のシラバス」を一部分作りました。それから、ある課を  
とりあげて、1課の設計図にあたる「課の構成」を作りました。



**3 プロトタイプを作成し、評価する**  
『教材開発』2-3、2-4)

そのあと、ランさんたちは、ある課を選んで、プロト  
タイプ(教材の一部分)を作成しました。それを学習者に  
使ってみて、評価を2回行いました。1回はひとりの  
学習者に使ってもらい、教材を使う教師や学習者が、  
その教材の指示や説明などを理解し、順調に学習を  
進めることができるかを評価しました。もう1回は、  
学習者が20人いるクラスで使って、その教材で学習する  
前と学習した後で、学習効果があるかどうかを、テストや  
インタビューで評価しました。その結果をもとに、プロト  
タイプを改善しました。

**4 企画書を作成する** (『教材開発』3章)

最後に、ランさんたちは、コースの現状分析、使用  
教材の分析、教材のシラバスと課の構成、プロトタイプ  
とその評価について企画書にまとめました。さらに  
教材作成にかかる予算、作成メンバーの役割分担や  
責任範囲、教材作成のスケジュールを加えて、企画書  
を完成しました。

**4. 教材作成はこれからも続く...**

ランさんたちは、企画書を提出し、校長先生からOK  
をもらうことができました。これから、プロトタイプを  
もとに分担して執筆します。半年後には試用版が完成する  
予定です。それを実際のコースで使ってみて、改善し、  
完成版にします。

教材作成には、幅広い専門知識・技術・リソースを  
必要とします。全ての能力を一人で持つことは難しいので、  
ラン先生のようにチームで教材作成をするといいでしょう。  
仲間を見つけて、教材作成を始めましょう。

**参考文献**

小柳かおる (2004) 『日本語教師のための新しい言語習得概論』  
スリーエーネットワーク  
高田徳子・柴原智代 (2008発行予定) 教授法教材シリーズ14巻  
『教材開発』国際交流基金  
鈴木克明 (2002) 『教材設計マニュアル-独学を支援するために』  
北大路書房  
Tomlinson (2003) Developing materials for language teaching.